

学部教育における学生の授業設計の手がかりに関する一考察

A Study of Clue of Undergraduates' Lesson Planning in the Education Department

○阿部藤子
Fujiko ABE

東京家政大学
Tokyo Kasei University

澤本和子
Kazuko SAWAMOTO

日本女子大学
Japan Women's University

【要約】教職課程の教科指導の学修において、学生が困難を感じるものの一つに、自分たちで授業設計をすることがあると考えられる。国語科教育の演習科目において、学生が何を手がかりに授業を設計していくのかを学生の記述をもとにふり返り考察した。教師が提示した文献資料や教材特性から授業を組み立てる糸口を見だし、さらにグループでの協同ワークによって授業の手立てを工夫しようとしていたことがうかがえた。

【キーワード】 教職課程・授業設計・困難・学生の記述

【研究目的】

学部教育の教職課程の科目の中で、教科教育に関する演習科目では、学生が授業計画を立て模擬授業を行うことが多い。知識も経験も十分でない学生が最も困難を感じるのは、教材研究に取り組んだ後の授業設計や指導案の作成ではないかと考える。実際に模擬授業をする際にも、予測不可能な事態に混乱したり、立ち往生したりすることもあるだろうが、その前段階として、授業の計画を自分一人で立てられ準備ができることが、まずもって教職に就く前に身につけておかなければならないことである。この困難については、筆者が毎年教育実習生を受け入れ指導する立場にいたときにも感じていたことであった。

教師の授業に関する実践的知識の研究は、秋田(1991)、三橋ら(2014)の研究などの蓄積がある。国語科教育の分野では、研究者自身が学部での授業を対象にした研究に、望月(1983)、鶴田(2007)、町田(2008)、渡辺(2006)らがある。これらは授業の概要や配慮事項などを記し反省的に考察したものである。しかし、実際に学生が何を考えつつ取り組んでいたかを明らかにした研究は少ない。学生がどの局面でどのような困難を感じるのか、何を手がかりとして授業を作っていくのかを学生の記述を中心に検討したいと考えた。

【研究方法】

筆者が今年度担当した「国語科教育演習」の模擬授業後の学生のふり返り記述をもとに考察した。

【科目の概要】

1 1年次からの国語科関連科目

本学科では1年次に「国語科基礎研究」、2年次に「国語科教育法」を必修で履修し、3年次で「国語科教育演習」を選択で履修する。いずれも後期2単位である。

2 「国語科教育演習」15回の概要

履修人数はA組46名、B組45名である。前年度までの学修について学生に尋ねたところ、教材研究や授業設計に強い不安があるということだったので、教材研究法について講義をした。「ごんぎつね」の前半の一場面に絞って教材研究を班で行うワークを取り入れながら教材研究の実際を学んだ。さらに、15回のうち2回は幼稚園実習のため休講となり課題を各自がこなすこととなり、十分な時間の確保が難しい中での模擬授業の準備と実施となった。

3 模擬授業の概要

15回の授業を通じて班単位での活動を中心とした。約6名で班を編成し、班ごとにM社の国語教科書1年から6年の教材の文学、あるいは説明的文章教材から一つを選んで模擬授業を行った。A組、B組ともに7班編成。模擬授業は、45分の

授業の計画を立てたうち 20 分を行い、その後短時間の協議の時間を設けた。すべての班が行った。

【抽出グループの模擬授業とそのふり回り】

すべての班の模擬授業終了後の授業で、授業をどのように設計していったか、難しさを感じたのはどのようなことか、どのように解決しようとしたかを思い出して記述してほしいと依頼した。各班の記述を整理し、以下でB組5班の記述を示す。

(他の班の記述については当日資料)

<B組5班の模擬授業>

教材：「お手紙」(2年生)

授業場面：手紙をもらえずにいたがまくんが、かえるくんが手紙を書いてくれたことを知り、二人が幸せな気持ちになる場面の読み取り

授業概要：手紙に書かれた「親愛」「親友」ということばの意味を考える。さらに二人が手紙が届くのを待つときの気持ちを、以前の気持ちと比べて考え、吹き出しにことばを書く。

<B組5班の記述>

授業設計の過程：この物語で伝えたいことは何かを考え友情や親友の大切さと決めた。読み込むうちに登場人物の気持ちの変化が大切だと気づき、二人の気持ちの変化を読み取らせるための方法を考えた。「ハートメーター」は難しいので「嬉しい」「悲しい」の二通りの顔を用いることにした。

困難を感じた点：気持ちの変化に気づかせるにはどのような授業展開にしたらいいか考えるのが一番難しかった。話し合いを重ね二つの気持ちだけ考えようということになった。目で見てわかるにはどうしたらよいか。

◎解決の方策：ハートの色塗り・ハートメーター・二人の表情の絵を描く・二人の表情を選ぶという案が出た。

【考察】

B5班と他の班でも共通点として挙げられていたのが、「授業の重点、何を教えたいかを考える」ということである。教材研究をして、本時で最も大事なことを、目標とすることを見極めることを、難しいながらも必死に考えていたことがうかがえた。さらに、困難点として、授業で核にしたいことが決まっても、それをどのような方法で展開していくかに苦戦していたことがうかがえた。いくつかの方法を考え、最も妥当と考える方法(2

種類の表情のかえるの絵を用意し、そこに気持ちを書く)に落ち着いたが、班内で時間をかけ話し合い検討している。

これらの記述の他に、他班では、困難を感じたこととして、「具体的にどのような発問を投げかけるか考えるのが難しかった」「子どもの実態がわからないのでどの程度のことはわかるのか、どういう言葉で話せばいいか困った」と記述している班が複数あった。解決の方策として「ひたすら教材を読みこんで考えた」「参考文献やネットでの情報を手がかりに考えた」「先生が配布した資料をよく読んで参考にした」などの方策から解決しようとしていたことが分かった。

【課題】

本研究では、授業後に想起して記述するという方法で、学生の授業設計の過程を考察した。具体的な記憶が十分でない面もあり、次年度に設計段階のその場の記録をデータとして採取したいと考える。また、本研究の対象となった学生が4年次にどのように授業設計をするかも継続して調査したいと考える。それらをもとに、その学生たちへの授業設計のために必要な手当てを追加的に行うことや、次年度の本科目や2年次、1年次の科目の内容構成に反映させていきたいと考える。

【参考文献】

- ・岩城京佑・大島翔子・三橋功一(2014)「算数授業観察における記述の分析」北海道教育大学紀要第64巻第2号 pp.277-288
- ・秋田喜代美・佐藤学・岩川直樹(1991)「教師の授業に関する実践的知識の成長—熟練教師と初任教師の比較検討—」発達心理学研究第2巻第2号 pp.88-98
- ・望月善次(1983)「国語科教育学の学部教育に関する一実践」岩手大学教育学部付属教育工学センター教育工学研究第5号
- ・町田守弘(2008)「『国語科教育法』をどのように扱うか—『メタ授業』としての要素を生かすために—」早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学編)第56号
- ・鶴田清司(2007)『国語科教師の専門的力量的形成—授業の質を高めるために—』溪水社
- ・渡辺春美(2006)「国語科模擬授業の実践研究—研究交流集会における模擬授業『松本美樹』」沖縄国際大学編著『国語科教職課程の展開—国語科教育実践力の探求』